

内集団奉仕的帰属に関する研究—韓日ワールドカップ・サッカー大会における日本と韓国の結果の帰属—¹⁾

佐久間 勲

In-group serving attribution in a real – world setting: Attributions for the results of Japanese and Korean team performances in the 2002 World Cup Soccer games –

Isao Sakuma

Abstract

This study examined the occurrence of in-group serving attribution in a real-world setting and the influence of patriotism on the attribution. Ninety-seven Japanese female college students completed a questionnaire. The questionnaire included three scales; an attribution scale for the results of Japanese and Korean team performances in the 2002 World Cup Soccer games, an impressions rating scale on Japanese and Korean, and a patriotism scale. In-group serving attribution was higher for high patriotism participants than low patriotism participants. In-group serving attribution correlated positively with impressions of Japanese and negatively with impressions of Korean. In-group serving attribution and the influence of patriotism on the attribution were discussed.

問 題

同じ行為であったとしても、その行為が内集団成員によるものか、それとも外集団成員によるものかによって、帰属が異なること、特に内集団成員に有利な帰属、つまり内集団奉仕的帰属 (in-group serving attribution) がなされることが指摘されている (Hewstone, 1990; Pettigrew, 1979)。例えば、内集団成員による望ましい行為は外集団成員による同様の行為と比較してより内的要因 (例えば性格、能力) に帰属されること、一方、内集団成員による望ましくない行為は外集団成員による同様の行為と比較してより外的要因 (例えば状況、運) に帰属される。こうした内集団奉仕的帰属によって、内集団の肯定的な印象、外集団の否定的な印象 (偏見) が形成・維持されるのである。

いくつかの先行研究は、シナリオを用いた実験 (架空の場面における集団成員による行為の帰属を回答させる実験) において、内集団奉仕的帰属がなされることを確認している (Hewstone & Ward, 1985; Islam & Hewstone, 1993; 馬・唐沢, 2000; Taylor & Jaggi, 1974)。また別の先行研究は、現実の場面にお

ける集団成員による行為の帰属を回答させるという方法を用いて、内集団奉仕的帰属がなされることを確認している。例えば、村田（2003）は日本人大学生を対象に、韓日ワールドカップ・サッカー大会（以下、韓日WCS大会）における日本と韓国の成績をどのように帰属するかを調査した。その結果、調査対象者にとって内集団である日本の望ましい結果（ベスト16）をより内的要因に帰属し、外集団である韓国の望ましい結果（ベスト4）をより外的要因に帰属することを見出している。

本研究も村田（2003）と同様に日本人女子短期大学生を対象に韓日WCS大会における日本と韓国の成績の帰属を調査する。そして先行研究と同様に内集団奉仕的帰属が見られるか追試することを第一の目的とする。ただし追試にあたり次の2つの点を変更する。第一に帰属の対象となる成績である。村田（2003）の研究では日本については「ベスト16」、一方の韓国については「ベスト4」という結果についての帰属を回答させているために、日本と韓国の結果の望ましさが等しくなかった。本研究では日本と韓国の結果の望ましさを等しくするために、「日本および韓国が決勝トーナメントに進出した」という結果についての帰属を回答させることにする。第二に帰属の測定方法である。村田（2003）は日本と韓国の結果の帰属を測定する質問項目として、内的要因、外的要因に関する質問項目をそれぞれ1項目ずつしか用意していなかった。また日本と韓国についての質問項目のワーディングが同じではなかった。例えば、日本の内的要因に関する質問項目は「これまでの努力の成果である」であるのに対して、韓国の内的要因に関する質問項目は「韓国は4強入りにふさわしい実力を備えていた」であった。本研究は、複数の帰属に関する質問項目を用意し、かつ日本と韓国の結果の帰属を測定する質問項目のワーディングをそろえることにする。先行研究と同様に内集団奉仕的帰属が見られるのであれば、日本人にとって内集団である日本の望ましい結果は、外集団である韓国の望ましい結果よりも内的要因に帰属し、逆に外的要因に帰属しないだろう（仮説1）。そして、内集団奉仕的帰属の結果、内集団に対する印象は外集団に対する印象と比較すると肯定的になるだろう（仮説2）。

さらに本研究は、愛国心（patriotism）が内集団奉仕的帰属に及ぼす影響について検討することを第二の目的とする。愛国心は国家態度（national attitude）のひとつの要素であり、国家主義（nationalism）とは区別されている（Kosterman & Feshbach, 1989）。愛国心が単なる内集団に対する愛着であるのに対して、国家主義は外集団に対する内集団の優位性を示すものと考えられている（Kosterman & Feshbach, 1989）。したがって国家主義は内集団奉仕的帰属を強めるのに対して、愛国心は内集団奉仕的帰属に影響をもたらさないと考えられるが、実際にそうであるかを検討する。

方 法

調査対象者

東京都内の短期大学で社会心理学関連の科目を受講している女子学生97名に対して質問紙調査を実施した。

質問紙の内容

質問紙は以下の順序で構成されていた。

- (1) 韓日WCS大会に関する質問 韓日WCS大会のテレビ視聴、韓日WCS大会における日本と韓国の結果（決勝トーナメントに進出したこと）を知っていたかどうか、サッカーへの関心について回答を求めた。
- (2) 韓日WCS大会における日本および韓国チームの結果の帰属 18個の原因を呈示し、それぞれの

原因がどのくらい、日本および韓国の決勝トーナメント進出の原因となっていると思うか回答を求めた（“非常にそう思う”～“非常にそう思わない”の5件法）。具体的な項目は付表1の通りであった。

（3）日本人および韓国人に対する印象 13個の単極形容詞により、日本人および韓国人に対する印象評定を求めた（“非常にそう思う”～“非常にそう思わない”の5件法）。使用した単極形容詞は付表2の通りであった。

（4）愛国心 唐沢（1994）の国際意識尺度の下位尺度のうち愛国心尺度に対して回答を求めた。愛国心尺度は7項目からなるものであった（“賛成”～“反対”の5件法）。

（5）デモグラフィック変数 調査対象者の性別、年齢、学年についての回答を求めた。

（2）帰属、および（3）印象のなかでどちらの国を最初に回答するかについてはカウンターバランスをとった。

質問紙調査の実施方法と所要時間

授業時間内の一部または授業時間外に集合形式で実施した。調査への回答時間はおよそ10分であった。

質問紙調査の実施時期

2002年7月中旬であった。日本および韓国が決勝トーナメントに進出を決めた日は2002年6月14日であった。韓日WCS大会は2002年6月30日に閉幕していた。

結 果

分析対象者

調査対象者のうち、「日本が決勝トーナメントに進出したこと」および「韓国が決勝トーナメントに進出したこと」のいずれか一方、または両方を知らなかった者を分析から除外した。その結果、分析対象者となったのは90名であった。

尺度得点の算出

主要な分析を始める前に帰属に関する質問項目、印象評定項目、および愛国心の質問項目についての尺度得点を算出した。

日本および韓国が決勝トーナメントに進出した結果の帰属に関する質問項目については、それらの質問のうち、その原因が選手、チーム、監督などのチームに関わるものにあると考えている項目を内的帰属項目とした。一方、サポーター、国家の援助、審判の判定、運などのチーム以外にあると考えている項目を外的帰属項目とした（付表1を参照）。日本、韓国ごとに内的帰属項目および外的帰属項目の平均を算出して内的帰属得点および外的帰属得点とした。 α 係数は日本の内的帰属得点は.81、日本の外的帰属得点は.72、韓国の内的帰属得点は.85、韓国の外的帰属得点は.68であった。

日本人と韓国人の印象評定項目については、「いろいろな人がいる」を除いた12項目について、日本人、韓国人ごとに平均を算出して印象得点とした。印象得点が高くなるほどその国民に対する印象が肯定的であることを示すように、いくつかの項目は逆転して平均を算出した。 α 係数は日本人に対する印象得点は.68、韓国人に対する印象得点は.74であった。

愛国心については唐沢（1994）と同様の手順に基づき愛国心得点を算出した。愛国心得点の α 係数

佐久間 勲：内集団奉仕的帰属に関する研究－韓日ワールドカップ・サッカー大会における日本と韓国の結果の帰属－
は.87であった。

調査対象者の分類

調査対象者を愛国心得点の中央値（3.71）に応じて2つの群に分類した。愛国心得点が中央値を下回った調査対象者を愛国心弱群（ $n=39$ ）、中央値を上回った調査対象者を愛国心強群（ $n=43$ ）とした。

日本と韓国の結果についての帰属

愛国心の強弱群ごとに、日本と韓国の内的帰属得点、外的帰属得点の平均値を算出した。その結果を表1に示した。²⁾ 内集団奉仕的帰属が生起しているか、さらには愛国心が内集団奉仕的帰属の生起に影響を及ぼすかを検討するために、愛国心×帰属得点の種類×国の種類の3要因の分散分析を実施した（愛国心は被験者間要因、帰属得点の種類と国は被験者内要因）。その結果、帰属得点の種類の主効果、帰属得点の種類×国の交互作用が有意であった（それぞれ順に、 $F(1,63)=7.77, p<.01, F(1,63)=33.36, p<.01$ ）。それに加えて、愛国心×帰属得点の種類×国の交互作用が有意傾向であった（ $F(1,63)=3.47, p<.10$ ）。

帰属得点の種類×国の交互作用を詳細に検討するために、帰属得点の種類ごとに国の単純主効果の検定を実施した。その結果、内的帰属得点および外的帰属得点ともに単純主効果が有意であった（それぞれ順に、 $F(1,126)=10.70, p<.01; F(1,126)=13.44, p<.01$ ）。内的帰属得点に関しては、日本は韓国よりも得点が高かった（ $M=3.81$ vs $M=3.60$ ）。逆に外的帰属得点に関しては、日本は韓国よりも得点が低かった（ $M=3.37$ vs $M=3.61$ ）。この結果は、日本の決勝トーナメント進出の結果を韓国の結果と比較して内的要因に帰属し、外的要因に帰属しないこと、つまり内集団奉仕的帰属を示すものであった。この結果は仮説1を支持するものであった。

続いて愛国心×帰属得点の種類×国の交互作用を詳細に検討するために、愛国心の強弱群ごとに帰属得点の種類×国の単純交互作用の検定を実施した。その結果、愛国心弱群、愛国心強群ともに単純交互作用は有意であった（それぞれ順に $F(1,63)=7.50, p<.01, F(1,63)=29.48, p<.01$ ）。これらの単純交互作用を詳細に検討するために、帰属得点の種類ごとに国の単純・単純主効果の検定を実施した。その結果、愛国心弱群では外的帰属得点において国の単純・単純主効果が有意傾向であった（ $F(1,126)=3.61, p<.10$ ）。日本の外的帰属得点は韓国の外的帰属得点よりも低かった（ $M=3.38$ vs $M=3.55$ ）。愛国心強群では、内的帰属得点および外的帰属得点ともに単純・単純主効果が有意であった（ $F_s(1,126) \geq 10.18, p_s <.01$ ）。内的帰属得点については、日本は韓国よりも得点が高く（ $M=3.92$ vs $M=3.63$ ）、逆に外的帰属得点については、日本は韓国よりも得点が低かった（ $M=3.37$ vs $M=3.66$ ）。この結果は愛国心弱群と比較して愛国心強群で内集団奉仕的帰属が強く生起していることを示唆するものである。

表1 日本・韓国の各帰属得点の平均値（愛国心強弱群別）

	内的帰属得点		外的帰属得点	
	日本	韓国	日本	韓国
愛国心弱群(n=32)	3.70 (.48)	3.58 (.65)	3.38 (.49)	3.55 (.57)
愛国心強群(n=33)	3.92 (.50)	3.63 (.52)	3.37 (.57)	3.66 (.46)
全体	3.81 (.50)	3.60 (.59)	3.37 (.53)	3.61 (.51)

・（ ）内は標準偏差。

・各帰属得点の範囲は1～5。それぞれの得点が高いほど日本または韓国が決勝トーナメントに進出した原因を内的要因または外的要因に帰属していることを意味する。

日本人と韓国人に対する印象

愛国心の強弱群ごとに、日本人および韓国人に対する印象得点の平均値を算出した。その結果を表2に示した。内集団奉仕的帰属の結果、日本人の方が韓国人よりも印象が肯定的になるか、さらには愛国心の程度によって、内集団奉仕的帰属が日本人と韓国人の印象に及ぼす影響が異なるかを検討するために、愛国心×国の2要因の分散分析を実施した（愛国心は被験者間要因、国は被験者内要因）。その結果、予測された国の主効果は有意ではなかった（ $F(1,74) = 0.11, n.s.$ ）。ただし愛国心×国の交互作用効果が有意であった $F(1,74) = 4.99, p < .05$ 。

愛国心×国の交互作用効果を詳細に検討するために、愛国心の強弱群ごとに国の単純主効果の検定を実施した。愛国心弱群では、国の主効果は有意ではなかった（ $F(1,74) = 1.82, n.s.$ ）。一方、愛国心強群では国の単純主効果が有意傾向であった（ $F(1,74) = 3.29, p < .10$ ）。愛国心弱群では2つの国民に対する印象は変わらなかったが、愛国心強群では、日本人に対する印象は韓国人よりも肯定的であった（ $M=3.25$ vs $M=3.09$ ）。これらの結果は仮説2を部分的に支持するものであった。つまり愛国心強群だけで仮説2が支持された。

表2 日本人・韓国人の印象得点の平均値（愛国心強弱群別）

	日本人	韓国人
愛国心弱群 (n=38)	3.12 (.41)	3.24 (.42)
愛国心強群 (n=38)	3.25 (.40)	3.09 (.45)
全体	3.18 (.41)	3.16 (.44)

・（ ）内は標準偏差。

・得点の範囲は1～5。得点が高いほど日本人、韓国人に対する印象が肯定的であることを意味する。

内集団奉仕的帰属と日本人、韓国人に対する印象

内集団奉仕的帰属と日本人、韓国人に対する印象の関連をより直接的に検討するために相関分析を実施した。日本の内的帰属得点から韓国の内的帰属得点を引き算した値と、韓国の外的帰属得点から

日本の外的帰属得点を引き算した値を算出し、これら2つの値を加算したものを内集団奉仕的帰属得点とした。この得点が高いほど内集団奉仕的帰属をしていることを意味する。この内集団奉仕的帰属得点と2つの国民に対する印象得点の間の相関係数を算出した結果、内集団奉仕的帰属得点と日本人の印象得点の間には有意な正の相関が見られた ($r=.36, p<.01$)。一方、内集団奉仕的帰属得点と韓国人の印象得点の間には有意な負の相関が見られた ($r=-.37, p<.01$)。つまり、内集団奉仕的帰属をするほど、内集団である日本人に対しては肯定的な印象、外集団である韓国人に対しては否定的な印象を持っていた。

考 察

内集団奉仕的帰属について

先行研究と同様に、本研究においても内集団奉仕的帰属が見られた。この結果は内集団奉仕的帰属がさまざまな調査対象者において確認されることを示唆している。さらに相関分析の結果ではあるが、内集団奉仕的帰属の傾向が強いほど、内集団である日本人に対しては肯定的な印象を持ち、外集団である韓国人に対しては否定的な印象を持つようになっていた。この結果は内集団奉仕的帰属が、内集団の肯定的な印象、外集団の否定的な印象の形成・維持に寄与していることを示唆している。

愛国心と内集団奉仕的帰属の関連

愛国心弱群と比較して愛国心強群において内集団奉仕的帰属が強く生起していた。この結果は愛国心が国家主義と同様に内集団奉仕的帰属に影響する可能性を示唆するものである。愛国心が内集団奉仕的帰属に及ぼす影響をさらに検討するために、愛国心得点と日本および韓国の内的帰属得点、外的帰属得点の間の相関係数を算出した。その結果、愛国心得点と日本の内的帰属得点の間に有意な正の相関が見られたが ($r=.30, p<.01$)、日本の外的帰属得点、韓国の内的帰属得点、韓国の外的帰属得点の間には有意な相関が見られなかった ($|rs| <.17, ps>.10$)。さらに愛国心得点と内集団奉仕的帰属得点との相関係数は有意でなかった ($r=.19, n.s.$)。これらの結果から、愛国心は内集団成員の行為を有利に帰属することだけに影響すると考えられる。本研究ではデータは得られていないが、国家主義は内集団成員による行為を有利に帰属することと外集団成員の行為を不利に帰属することの両方に影響すると推測される。ただし国家主義の影響については現段階では推測にすぎない。今後、検討が必要である。

本研究の問題点

本研究は現実の場面において内集団奉仕的帰属がなされること、内集団奉仕的帰属をするほど内集団に対して肯定的な印象を持ち、外集団に対して否定的な印象を持つこと、愛国心が高いほど内集団奉仕的帰属も強くなること（特に内集団成員による行為を有利に帰属する傾向が強くなること）が明らかになった。しかしながら本研究には次の問題があると考えられる。第一に帰属の結果に関する別解釈の可能性である。本研究は日本人女子短期大学生だけを対象に調査を実施し、外集団成員による望ましい行為と比較して内集団成員の同様の行為をより内的要因に帰属し、外的要因に帰属しないことをもって内集団奉仕的帰属が見られたと考えた。しかし本研究で得られた帰属に関する結果が“バイアスがかかった”帰属であるのか、それとも“正確な”帰属であるのかは不明である。つまり実際に日本の結果は能力や技術などの内的要因によるものであり、韓国の結果は運や審判の影響などの外

的要因によるものであった可能性も否定できないのである。この別解釈を排除するためには、(1)日本人、韓国人以外に本研究と同様の調査を実施して、その調査対象者と比較して本研究の調査対象者が日本に有利な帰属をしている、韓国に不利な帰属をしていることを示すこと、または(2)韓国人に本研究と同様の調査を実施して、韓国人も内集団奉仕の帰属をしている(韓国人にとって内集団である韓国の望ましい結果は、外集団である日本の望ましい結果よりも内的要因に帰属し、逆に外的要因に帰属しない)ことを示すことが必要である。第二に、本研究の対象となった結果に関する問題である。本研究は、内集団成員と外集団成員の望ましい結果についての帰属だけしか検討していない。内集団成員と外集団成員の望ましくない結果の帰属を取り上げた場合にも内集団奉仕的帰属がなされるかどうか、具体的には外集団成員による望ましくない結果と比較して内集団成員による同様の結果はより外的要因に帰属され、内的要因に帰属されるかどうかは不明である。今後は望ましくない結果についての帰属も対象として研究を実施することが必要である。

引用文献

- Hewstone, M. 1990 The 'ultimate attribution error'? A review of the literature on intergroup causal attribution. *European Journal of Social Psychology*, **20**, 311-335.
- Hewstone, M., & Ward, C. 1985 Ethnocentrism and causal attribution in South Asia. *Journal of Personality and Social Psychology*, **48**, 614-623.
- Islam, M. R., & Hewstone, M. 1993 Intergroup attributions and affective consequences in majority and minority groups. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64**, 936-950.
- 唐沢穰 1994 日本人の国民意識の構造とその影響 日本社会心理学会第35回大会発表論文集、246-247.
- Kosterman, R., & Feshbach, S. 1989 Toward a measure of patriotic and nationalistic attitudes. *Political Psychology*, **10**, 257-274.
- 馬偉軍・唐沢穰 2000 内集団同一視が集団奉仕的原因帰属バイアスに及ぼす影響 日本社会心理学会第41回大会発表論文集、474-475.
- 村田光二 2003 韓日W杯サッカー大会における日本人大学生の韓国人、日本人イメージの変化と自己奉仕的帰属 日本グループ・ダイナミクス学会第50回大会発表論文集、122-123.
- Pettigrew, T. 1979 The ultimate attribution error: Extending Allport's cognitive analysis of prejudice. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **5**, 461-476.
- Taylor, D. M., & Jaggi, V. 1974 Ethnocentrism and causal attribution in a south context. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, **5**, 162-171.

注)

- 1) 本研究の一部は日本心理学会第67回大会(東京大学)にて発表された。
- 2) 帰属、および印象の分析では最終的な分析対象者(90名)から、さらに一部の調査対象者が除外された。これらの多くは帰属および印象の質問項目に欠損値があったことが原因である。

付表1 帰属に関する質問項目

[内的帰属に関する質問項目]

- ・日本チームの中に強力なリーダーがいたから。
- ・日本チームは大会前に十分準備をしていたから。
- ・日本の選手は一生懸命に練習をしたから。
- ・日本の選手のやる気が高かったから。
- ・日本の選手の精神力が強かったから。
- ・日本の選手が海外で十分な経験をつんでいるから。
- ・日本の監督が優秀であったから。
- ・日本チームは全体としてまとまっていたから。
- ・日本の選手のサッカーの技能が高いから。
- ・日本の選手は体力があるから。

[外的帰属に関する質問項目]

- ・運がよかったから。
- ・自国開催の大会であったから。
- ・日本サッカー協会から手厚いサポートがあったから。
- ・予選で対戦したチームの調子が悪かったから。
- ・日本国家から手厚いサポートがあったから。
- ・審判の判定が日本に有利だったから。
- ・予選の組み合わせに恵まれたから。
- ・日本のサポーターの応援があったから。

注) 韓国の結果の帰属についての回答を求める場合は質問文の「日本」の部分すべて「韓国」に変えた。

付表2 印象評定に使用された単極形容詞

寛大な、劣っている、不器用な、冷たい、親しみにくい、知的な、信頼できる、自信がある、好ましい、競争的な、のろまな、不誠実な、いろいろな人がいる